

# 少年の日の悲哀

小川未明

青空文庫



三郎はどこからか、一ぴきのかわいらしい小犬をもらってきました。そして、その小犬をかわいがっていました。彼はそれにボンという名をつけて、ボン、ボンと呼びました。ボンは人馴れたやさしい犬で、主人の三郎にはもとよりよくなつきましたが、まだだれでも呼ぶ人があれば、その人になついたので。だから、みんなにかわいがられていました。三郎は朝早く起きてボンを連れて、空気の新鮮なうちに外を散歩するのを楽しみとしていました。また、小川に連れて行って、ボンを水の中に入れて毛を洗つてやつたりして、ボンを喜ばせるのをも楽しみの一つとしていゝのです。

三郎は、独り犬ばかりでない猫もかわいがりました。また、小鳥や、金魚などをもかわいがりました。なんでも小さな、自分より弱い動物を愛したのであります。

三郎の隣に、おばあさんが住んでいました。そのおばあさんは、一ぴきの猫を飼っていました。その猫は、よく三郎の家へ遊びにきました。くると三郎は、その猫を抱いて、顔を付けたたり、頭をなでたりしてかわいがってやりました。猫はよくやってきて、三

一郎が大事だいじにしておいた金魚きんぎよを殺ころしたり、またお勝手かっぺにあつた魚さかなを取とつたりしたことが、たびたびありました。けれど、三郎さぶろうは猫ねこをいじめたことがありませんでした。それは猫ねこの性質せいしつだから、しかたがないと思おもつたのです。

けれど、そのおばあさんは、いじの悪いおばあさんでした。ボンがお勝手かっぺもとへゆくと、なんにもしないのに水みずをかけたなり、手てでぶつまねをしたり、あるときは小石こいしを拾ひろつて投げつけたりました。そして、夜よが明けると、おばあさんは勝手かっぺもとの戸とを開あけて、外そとに出でると、

「ほんとうにしかたのない犬いぬだ。こんなところに糞ふんをして、あんな犬いぬつてありやしない。」  
と大きな声こえで、さもこちらに聞きこえるようにどなるのであります。

ほんとうにこのおばあさんは、自分じぶんかつてなおばあさんでした。自分の家うちの猫ねこが、近きんじ所よの家うちへいって魚さかなをくわえてきたのを見みても知らぬ顔かおをしていました。そんなときは、  
「こう、こう、こう、みいや、家うちへ入はいつておいで。」

といつて、猫ねこを家うちの中なかへ入いれて、戸とを閉しめてしまいます。

三郎さぶろうは、かわいがっているボンが、おばあさんのために小石こいしを投げなげられたり水みずを頭あたまからかけられたりしてきますと、今度こんど、おばあさん家の猫ねこがきたら、うんといじめてやろうと思おもう

いました。しかし、猫がやってきますと、いつも三郎がその猫をかわいがっているものですから、すこしもおそれず、すぐに三郎のそばに、なきながらすりよってくるのでした。これを見ると、もう三郎は、その猫をいじめるといような考えがまったくなくなつてしまいました。そして、猫の頭をなでて、いつものごとくかわいがってやったのであります。

## 二

ボンは、おとなしい犬でありました。それにかかわらず、この犬を悪くいったのは、この隣のいじの悪いばあさん一人ではなかつたのであります。もう一軒近所に、たいへんに犬を怖がる子供のある家がありました。ほかの子供らは、みな犬といっしょになつて遊んでいましたのに、その子供だけは、どういふものか臆病者で、犬を見ると怖がつていたのです。そして、ボンが尾を振りながら、なつかしそうにその子供のそばへゆきますと、子供は犬の頭をなでてかわいがろうとせずに、火のつくように泣きたつて家へ駆けこむのであります。

「どうしたんだ。」

と、びっくりしてその子供の母親が家から飛び出してきます。すると子供は泣きじやくりをしながら、

「犬が追っかけたんだ。」

といいます。母親はこれを聞いて、

「ほんとうに悪い犬だ。あっちへゆけ。」

といつて、おとなしくしているボンを棒でなぐったり、また、ものをぶつけるまねなどをして追うのです。

「お婆さん、犬はなにもしないんですよ。」

と、三郎はじめ他の子供がいましたも、その子供の母親は耳に入れません。なんでも犬を悪いことにしてしまつて、ボンを見るといじめたのであります。

ボンは隣の婆あさんと、その弱虫の子供の母親から、さんざん悪くいわれました。

「三郎や、あんなに、ご近所でやかましくおつしやるのだから、ボンを、だれかほしいという人があつたら、やつたらどうだい。」

と、姉や祖母が、三郎にいいました。

三郎はそこで考えました。しかしどう考えてみましても、ボンにすこしの悪いところがあるかもしれませんものを、そして自分がこんなにかわいがっていますものを、ほかにやらなければならぬという理由がないと思いました。

「だつて犬がなんにもしないのに、犬をしかる道理がない。これは人間のほうが、かえつて悪いのじやありませんか。僕はいくら近所でやかましくいって、犬が悪くないのだから、ほかへやるのはかわいそうでなりません。もしほかへやったら、どんなに悲しがつて泣くかしません。」

と、三郎は、姉や祖母にいいました。

隣のばあさんは、犬をしかりながら、自分の家の猫はひじょうにかわいがつていました。もし夜中に外で、猫が猫とけんかでもしていますと、ばあさんは起きて出て、物干しざおを持つてきて、猫がけんかをして鳴いているほうへゆきました。そして、自分の家の猫に向かつているほかの猫を突いたりなぐったりしたのです。

あまりばあさんが自分かつてのものですから、三郎はある日のこと、隣の猫をしばらくの間隠してやりました。するとばあさんは、きちがいのようになって猫を探して歩きましました。

「チヨ、チヨ、チヨ、みいや。こう、こう、みいや、みいや……。」  
とわめきながら、四辺あたりを歩きまわりました。そして、しまいには一軒一軒けんけん、よその家うちおとすを訪れて、

「家の猫ねこはきていませんでしょうか。」

と、聞いて歩あるきました。三郎さぶろうは、あまりばあさんが気きをもんでいるのを見て、はじめはおもしろうございしましたが、しまいには不憫ふびんになつて、ついに猫ねこを放はなしてやりますと、ばあさんは飛とびたつばかりに猫ねこを抱だきあげて喜よろこんでいました。

## 三

ある日ひの朝あさ、三郎さぶろうは起おきて外そとに出でますと、いつも喜よろこんで駆かけ寄よってくるボンが見みえませんでした。彼かれは不思議ふしぎに思おもつて口笛くちふえを鳴ならしてみました。けれど、どこからもボンはしの走はしつてくる姿すがたを見みいださなかつたのであります。

「ボンはどこへいったらう。」

と思おもつて、三郎さぶろうは口くちにボンなの名なを呼よびながら、あつちこつちと探さがして歩あるきました。けれ



ど、ついにその影・形を見なかつたのです。三郎は隣のばあさんが、いつか猫が見えなかつたときに、きちがいのようになって探して歩いたのを思い出して、あのときは猫を隠して悪いことをしたと後悔いたしました。

ちようどそこへ、隣のばあさんがきかかりまして、

「こんな早く、なにをしておいでだい。」

と、ばあさんは聞きました。

「ボンが見えなくなつたので探しています。」

と、三郎がいますと、ばあさんは、さもうれしそうな顔つきをして、

「そうかい。もう、家の勝手口に糞をしなくて、それはいいあんばいだ。」

と、独り言をしてゆきすぎました。また弱虫の子供の母親は、ボンがいなくなつたと聞いて、家の外に出て、いい気味だといわぬばかりに笑っていました。

三郎は悔しくてしかたがありませんでした。しかし、いくらほうほうを探しても、ボンはいなかつたのであります。彼は、いまごろボンは、どこにどうしているだろうと思ひました。だれに連れられていったものか、また路を迷つたものか、あるいは縛られていようか、ほかの子供や、大きな犬にいじめられていようか、と、いろいろのことを考えて、

その夜は眠られなかつたのであります。そして、幾日か過ぎました。その間、三郎は一日としてボンのことを忘れた日はなかつたのです。

それから、またしばらくたつたある日のことであります。三郎が我が家から程隔たつたところを歩いていきますと、ある大きな屋敷がありまして、その門の前を通りますと、門の中で子供らと犬とが遊んでいました。

三郎はふとのぞきますと、なんで自分が一日も忘れなかつたほどにかわいがつていたボンを忘れることがありましよう。まさしくその犬はボンでありました。どうして、こんなところにきたらうと不審に思いながら、よく見ていきますと、子供らは、たいへんにこの犬をかわいがつていました。三郎は、しばらく立つてこのようすを見ていましたが、ボンは、いまだ三郎を見つけませんでした。そこで三郎は口笛を鳴らしました。すると犬は、この口笛を聞きつけて、急に飛び上がつてこつちへ駆けてきました。そして喜んでクンクン泣いて三郎にすがりつきました。三郎はまたうれしさのあまり、犬を抱き上げて犬の毛の中に頬をうずめました。

門の中の子供らは、たいそうこの有り様を見て驚きました。そして、犬の後を追つて門のところまで出てきてみますと、もはや犬が外をもふり向かずに三郎についてあつちへ

ゆきかけますので、中にも一人の子供は、しくしく声をたつて泣き出しました。

「君、その犬をつれていつてはいけない。」

と、その中の一人が、三郎に向かつていいました。

「これは僕のかわいがつていたボンだよ。十日ばかり前に見えなくなつたのだ。いま、見つけたから、つれて帰るんだよ。」

と、三郎は答えました。

「ああ、そんなら君のところの犬だったのかい。十日ばかり前に、牛乳屋がいい犬を拾ってきたといつてくれたのだよ。そんなら、それは君の家のだけかい……。」

といつて、子供らは残念そうにして立つていました。中にも一人の子供はやはり泣いていました。

このようすを見ますと、三郎は子供らがかわいそうに思われました。あんなに犬を大事にしてかわいがつてくれるなら、いつそのこと、この犬を子供らにあたえようかという考えが起こつたのです。そして、ふたたび自分の家へつれて帰ると、隣のいじ悪いばあさんがまた犬をしかるばかりでなく、あの弱虫の子供の母親までが犬をいじめると思いました。いつそ犬を子供らにあたえたほうが、かえつて犬のしあわせになるかもしれない

とおも  
と思いましたが、

「君きみらが犬いぬをかわいがってくれるなら、この犬いぬを君きみらにあげよう。」

と、三郎さぶろうはいいました。

「ああ、僕ぼくらは、ほんとうにかわいがるから、どうかこの犬いぬをおくれよ。」

といつて、子供こどもらは意外いがいなのに、驚おどろかんばかりに喜よろこびました。そして三郎さぶろうから、その犬いぬをもらいました。ひとり三郎さぶろうは、なごり惜おしそうにしてさびしく、ひとり我わが家やの方ほうへ帰かえっていったのであります。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「少年世界」

1917（大正6）年10月

※表題は底本では、「少年《しょうねん》の日《ひ》の悲哀《ひあい》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 少年の日の悲哀

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>